

【ポスター発表】

地方都市高齢者の生活と地域活動への参加意識の変化と展望**－高齢者の生活意識と地域活動の年代別変化－**

○ 松本短期大学 百瀬 ちどり (会員番号 8059)

村山 くみ (東北福祉大学大学・会員番号 5666)、

キーワード：地方都市高齢者、地域活動、団塊の世代

1. 研究目的

2012年以降、「団塊世代」が老年期に入っている。「団塊世代」は人口の多さとともに様々な特徴を持ち、今後の日本の高齢社会に大きな影響を与えていると言われている。そこで、本研究では「団塊世代」を含む高齢者と「団塊世代」を含まない高齢者では生活や地域活動への参加意識に変化はあるのか、実態について、2012年度以前と以降の地方都市の地域高齢者を対象に、年代で比較検討し変化の有無を明らかにすることとした。

2. 研究の視点および方法**1) 研究の視点**

「団塊世代」を含む地域高齢者の生活や地域活動への取り組み姿勢に変化はあるのか、社会関連性尺度(安梅)を用いてその得点と内容を比較検討した。また、「団塊世代」は性差による役割分業が確立した世代でもあり、性差による変化にも注目した。

2) 研究方法

(1)研究協力者：A県B市の福祉事務所が主催する2009年度及び2013年度のシニア大学の調査日当日の65歳以上の受講者、2009年度230名(男性102名、女性128名)、2013年度218名(男性76名、女性142名)を対象とした。質問紙の基本属性の項目に欠損のない2009年度185件(男性91名、女性94名)、2013年163件(男性74名、女性99名)を有効回答とした。調査項目は基本属性・主観的健康感・社会関連性指標・健康生活習慣について男女別に比較した。2013年度は「生きがいを感じる時」の自由記述を追加した。

(2)調査方法：質問紙を用い、2009年度、2013年度共にシニア大学の講義会場で集合調査を行った。回収は、自由意志とし、主催者の了解を得て回収箱を設置し、後日受け取った。(3)分析方法：量的データは、各調査項目について単純集計を行い全体を把握した。統計処理は表計算ソフトExcelを用いてデータセットを作成し、SPSS for Windowsバージョン11を使用し集計解析を行った。単変量解析では年代別の回答を性差で2群にし、t検定、 χ^2 検定により有意差の検討を行った。生きがいについての自由記述をテキストマイニングにより分析した。

3. 倫理的配慮

本研究では調査への回答は無記名とし、統計的に処理することで個人が特定されないようにすること、調査への協力は個人の意思に沿い、非協力でも何の不利益も生じないこと、研究以外にデータを使用することは無いことを文書と口頭で説明し、質問紙の提出をもつ

て同意とした。(尚、本研究は松本短期大学研究倫理審査委員会の承認を得た)

4. 研究結果

参加者の平均年齢は2013年で、男 71.28 ± 4.45 歳、女 69.33 ± 3.32 歳で、ともに上昇している。基本属性の中で有意差が見られるのは男性の参加者の同伴者の有無のみである。参加のきっかけはどちらも自分で決めているが2009年度では他者から勧められて参加、複数で参加している傾向にある。生活面では、男女ともに1日のうちの8時間程度の労働時間を有している者が有意差に上昇している。社会関連性指標得点を見ると、男性では2009年度と比較し2013年度では近所付き合いが有意に減少している。女性でも地域活動への参加が減少傾向にある。また、新聞を購読することが減少し、代わって生活面での便利な機器の利用が上昇しこれらの項目で有意差が見られている。生きがいを感じる時の自由記述では、抽出言語から5つのクラスターに分類し、クラスター1を「したいことができる時」クラスター2を「家族との毎日の生活」、クラスター3を「趣味活動」クラスター4を「人の役に立つ時」クラスター5を「友人との交流」と解釈した。

5. 考察

男女ともに2013年度では1日8時間の労働をしていると答える人が有意に上昇している。厚生労働省の「就労条件総合調査」によれば、65歳以上を定年とする企業の割合が上昇し、定年後の再雇用制度や勤務延長制度などを取り入れる企業も増え高齢者の就業率は高まっている。定年後も就労の機会があることや、仕事を生きがいとして過ごしてきた男性では、仕事に対しての能力発揮に基づく自己実現意識が就労を高めているとも考えられる。女性の就業率の上昇の背景は、高学歴世代で自立志向が高く、子供の独立とともに再度社会へ出る、ということや経済的な理由、地域特性も背景にあると考えられる。「団塊世代」は男女とも自らの役割を特化することで活動領域と人間関係を作り、またそれまでの世代以上に個人と家族を大事にする私生活主義の傾向が強い世代でもであると評される。特に男性の場合、長い期間を会社で過ごしているため地域との関係の築き方は手探り状態であるとも言われている。2009年度と比較し2013年度では男性の近所付き合いが減少している。それまで地域活動の実質的な担い手であった女性でも地域活動への参加が著しく低下している。この傾向は、就労との関係が否めない。生活の中で機器等の活用が上昇している点も女性の社会進出と切り離せない。専業主婦として家事に従事してきた時間から、便利な機器を利用して家事の時間を短縮し、「したいことができる」時を作っていると考えられる。さらに「団塊の世代」はボランティアなどの社会活動は積極的である。これは自己決定に基づく自らが「したいこと」と考えられ、生きがい記述にも反映している。

就業という社会参加活動は5年で増加しているが、地域活動は低下傾向にある。自己決定に基づく活動は積極的であるが、求められる活動への参加は消極的という地方都市の「団塊世代」高齢者像の実態が明らかになり今後の課題と考えられる。今後「団塊世代」は増加し、地域活動のあり方も変化していくと考えられ、その対応も求められる。